

松本清張記念館

◆ 館報 ◆

2016.3
第51号

ノッポは、愛すべき人間であった。



『高校殺人事件』昭和36(1961)年
カッパ・ノベルス

現在入手できる本
『高校殺人事件』光文社文庫

『高校殺人事件』(原題「赤い月」)は、昭和34(1959)年11月から昭和35(1960)年3月まで「高校上級コース」に、昭和35年(1960)年4月号より昭和36(1961)年3月号まで「高校コース」に連載された。

目次

- 松本清張研究会 第33回研究発表会…………… 2
- 特別企画展
『世界文学と清張文学』…………… 5
- 展示品紹介…………… 6
- 点描 作品の舞台を訪ねて…………… 6
- 研究誌『松本清張研究』第十七号発刊…………… 7
- 友の会活動報告…………… 7
- トピックス…………… 8

作品紹介

武蔵野の名残豊かな雑木林と多摩川の中間にある丘の上に、高等学校が建っている。

その高校に通う主人公は、仲の良い7人組で楽しい学校生活を送っていた。中でも小西重介という、背が高く痩せた猫背の男は、少し変わっていたが人気者であった。皆は彼のことを「ノッポ」という愛称で呼んだ。

ノッポはポードレールやアラン・ポーの詩を崇拜し、自身も詩を書いていた。ある時、ノッポは、自作の詩に「死の(笛の音)を登場させた。幻聴が聞こえたのさ」と決め付ける主人公に、「ノッポは」ほんとうには、はつきりと、この耳で聞いたんだ」と言って、その夜、現場である沼へと出かけ、翌日、遺体となって発見された。

愛すべき仲間、ノッポを殺したのは誰か？ 高校生たちは、手がかりを求め捜索を始める。間もなく、英語教師・中村先生の失踪や、郷土館管理人の自殺など、不穏な事件が次々と起こり、彼等のなかに、不安と焦燥、事件への強い関心が高まってゆく。

本作は「赤い月」と題して「高校上級コース」のち「高校コース」に連載された。主人公が高校生で、仲間たちと事件の謎を推理しながら、大人たちと対峙してゆく設定は、読者である高校生にとつて、大変身近に感じられたことだろう。

(専門学芸員 柳原暁子)

松本清張研究会 第33回 研究発表会

平成27年12月5日(土)午後2時 東京学芸大学

講演

松本清張歴史・時代小説考

—歴史学・時代考証からのアプローチ—

講師 大石 学

東京学芸大学 教授



江戸イメージの転換と時代劇の変化

近年、江戸時代について、250年以上も国内外で戦争をしなかった、世界史でも珍しい時代として、位置付け直そうという動きが出ている。それは、江戸時代が持つ「近代性」「文明性」を評価して、近代との「断絶」ではなく「連続」を重視する傾向とも連動している。それに伴い、私は時代劇も変わる必要があると考えている。ばったばったと人を斬り、善い人は必ず勝つ、勸善懲悪のチャンバラ時代劇はリアル江戸時代とは違うのではないか。私はポスト・チャンバラ(勸善懲悪の克服、お約束離れ)として、新しい時代劇が考えられるべきと思ってる。

私が関わった時代劇でいうと、『るろうに剣心』は、「見チャンバラ劇だが、悪人も悪人なりの人生を抱え、それなりの正義があり、それが主人公の正義とぶつかり合うドラマになっている。『柘榴坂の仇討』も、仇討で追う者と追われる者それぞれの人生を丁寧に描いている。こうい

う時代劇が近年増えてきている。それは、「チャンバラ時代劇」から「社会派人情物」へのシフトでもある。その一つが、私も関わったBSジャパン開局15周年特別企画『松本清張ミステリー時代劇』(全12回)である。社会の現実や歪み、人間のもつ性悪の側面が強調されたドラマだが、新しい時代の新しい感覚の時代劇になっている。

歴史学は政治史・事件史・経済史など、歴史の変化や発展に関心を置きがちなのに対して、松本清張は変わらない日常性や人間の普遍性に焦点を当てて、物語を紡ぎます。社会的貧困、差別・矛盾、それに伴う人間の心理に迫っていく。清張の社会派時代劇は今後ますます、チャンバラに変わってさまざまな視点から作り直され、鑑賞し直されるだろう。

清張の人物論と歴史観

清張の児童向けの著書『徳川家康』(講談社)には、「清張の人物論と歴史観」がクリアに記されている。

「信長も秀吉も家康も、個人の力ではしれていくということだ。かれらがじぶんの力で天下をとったとおもうのは大まちがいである。そういうふうにならせたのは、民衆の力であり、社会の情勢である。ただ、信長も秀吉も家康も、時代の選手であっただけである」

ここには、英雄史観とは違う、民衆の力を歴史の軸にすえた骨太の民衆史観が示されている。一方で個人の弱さも指摘し、集団の強さを強調している。

「家康は、信長、秀吉の死後を見て、どんなに個人の力が弱いかを知った。それで、家康がつくったのは、組織であった。徳川幕府が三百年間(そのあいだにはずいぶんばかな將軍もいたにも

かわらず)もつづいたのは、組織制度の力であった。そのことを考えついた家康の頭脳には、他の戦国名将のそれよりも足もともにおよばない」

「組織」は清張作品の大きな道具立てである。清張は、個人の支援・庄迫両面から「組織」に注目するが、ここでは、政治の継続には「英雄(個人)」ではなく、「組織」が重要なのだと言っている。家康が開いた長期の「平和」を評価している点も見逃せない。近現代史を見ていく上で、清張の江戸時代への評価は注目しなければならぬ。

清張長編と歴史学・時代考証

—「新装版・大奥婦女記」—

次は江戸城大奥に関する作品『大奥婦女記』である。「夫人(お江与)の高慢とお福(春日局)の勝気との間に妥協はなかった。夫人にすれば、このような乳母は退けたかったに違いないが、大御所家康のお声がかかりとあればわが自由にならなかった。それが余計に彼女を苛立たせる」

歴史学の論文ではこういう心理描写は書けない。それを読者が納得できる表現で書くところが、清張の大胆さであり強みである。



賢い矢島

局が三百石を得るといふ話は、『徳川諸家系譜第二』にあるエピソードである。完全な空想ではなく、清張は歴史資料を踏まえている。

一方、史実や歴史学の

研究成果と異なる記述もある。「將軍は、正夫人が死んでも、後妻というものを娶らないのである」とあるが、必ずしもそうではなくて、十三代家定は正室を三人持つている。

また、「日頃、江戸ッ子が軽蔑していた田舎侍」のトラブルが起こる。これもフィクションだが、この『江戸ッ子』は十八世紀後半の田沼時代が普及する言葉で、「江島生島」の段階で使うのは早い。

大奥の女性が隠れてお寺で男性と会う。作品では、脇坂安重(やすただ)はその事件を摘発したために毒殺されたとあるが、『大日本近世史料・柳宮補任1』で見ると、普通に亡くなっている。清張は、こういうフィクションを時々織り交ぜるので、幻惑される。清張作品を読むと、ああ、この史料、この研究をもとに書いているとわかる。清張は作るのではなく、多くの史料をもとにフィクションを書いている。史実、フィクションを含めて、清張の史料を尊重する姿勢は歴史学からも評価していい。

『乱灯・江戸影絵』

次は、長編の『乱灯・江戸影絵』である。享保年間(二七二六〜三六)、山下幸内という人物が目安箱に上書するという史実がある。清張はこの一件に注目する。幸内は浪人と言われる人で正体は不明。清張は幸内が吉宗の目安箱に上書して、その後出奔するところから話を始める。その後、岩瀬又兵衛という浪人が謎の上書をし、將軍吉宗を恐怖させるというフィクションを作る。実際の目安箱上書をヒントに、もう一つの上書というストーリーを清張は作るわけである。

まずは「目安箱」。

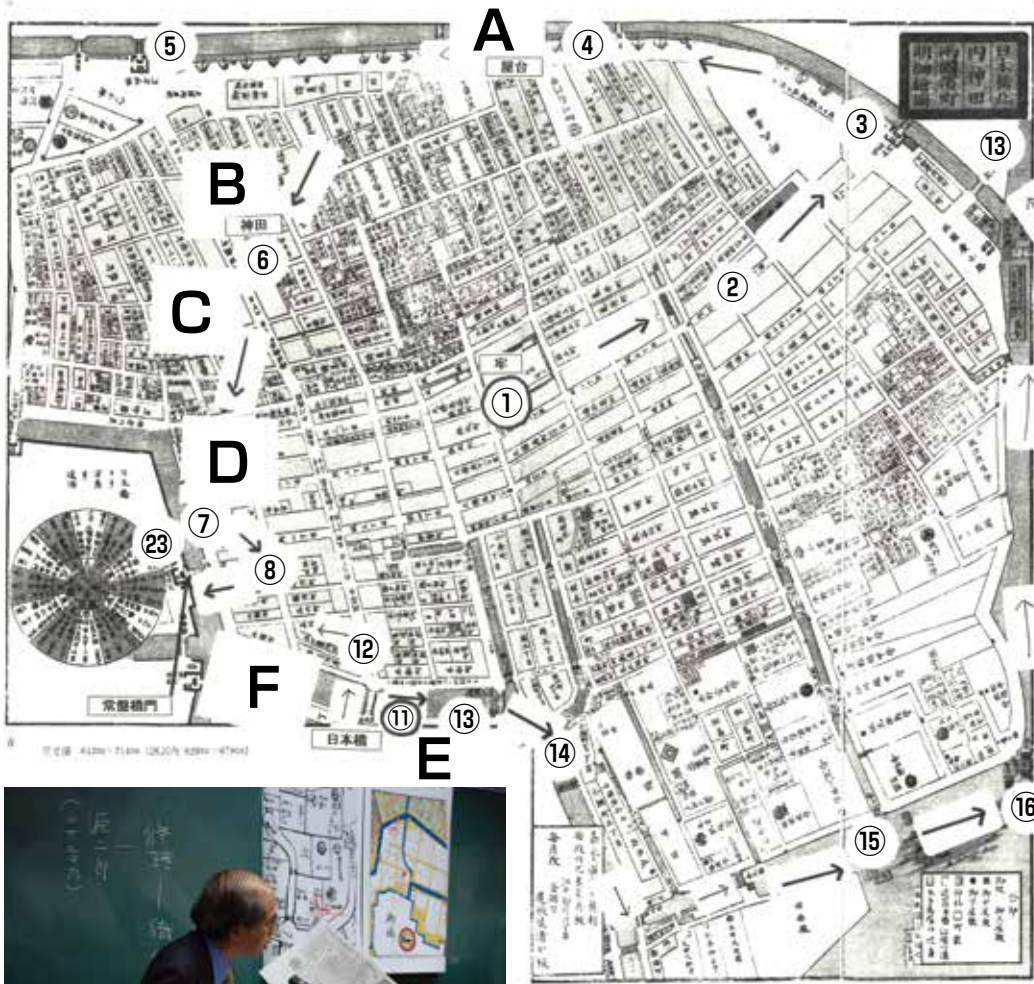
作品には、「享保十一年四月二十一日のことであつた(中略)男は、木目の浮いた門の柱につり下がっている四角な木箱を立ちどまつて見ていた。(中略)表には『目安箱』と墨書してあつた。上に穴があいていた」とあるが、これは誤りである。

直訴箱は、本島知辰の『月堂見聞集』によると、赤鉄（あかがね）が貼つてあり、上に穴が開いていて、前に錠がある。そして、吊り下がっていたのではなく、門前に置かれていた。

この第二の投書を読んで吉宗は驚愕する。清張は、山下幸内は実は越前福井藩の家老本多修理の弟、源二郎とし、続いて上書するのがその甥、織部とする。源二郎は「とうから隠居して」おり、織部は学者肌でぶらぶらしている源二郎

の生き方を憧れ慕っている。時代劇ではあるが、現代の刑事作品、社会派作品と同じ緊張やスリリングな描写が随所にある。

町奉行の大岡忠相がある殺人事件の犯人、幸太という男をわざと逃がさせ、尾行させる。スタートは左上の地図の①（半屋で、幸太は、②、③、④と歩く。清張はこの地図を元に作品を作つていったと推定できる。「幸太はまた歩い



作図協力・門田利沙



ていく。(中略)柳原土手は長かった(③から④)と歩く。「向うに提灯の灯が見える。(中略)屋台の飲み屋だった。(中略)幸太は茶碗に冷や酒を注がせると、顎を反らせて一気に咽喉に流したのである。(中略)幸太がすうとそこから離れた。(中略)亭主があわてて、『もし』と、飲み逃げのあとを追おうとした。『いくらだ？』弥作はうしろから亭主の肩を叩いた。(中略)『ほれ、渡すぜ』銭を投げるように屋台の上に置いた。(中略)弥作と藤兵衛はうしろから尾けていたが、その藤兵衛はときどき子分たちのもとに戻つては配置に気を配っていた」

屋台の場所が地図のAの辺りで、そこからB、Cの神田の町に向かう。「神田の町に入つていた。(中略)駕籠がとまった。暗い中でぐずぐずしている。しかし、駕籠屋は断つたとみえ、幸太は離れて行く。中略『いま、駕籠屋に訊きました。中略]奴は、行先を言わなかつたぞうです。』」藤兵衛が、屋台の代金をさつと払い、また、駕籠かきに尋ねるなど、かなりスリリングな描写である。続いて神田の宿屋に泊ろうとする。こういう追跡劇が描かれている。

「藤兵衛が眼をやると、あの年配の武士が橋を渡つて大股で戻つてきていた。(中略)武士は、幸太のところにくると、駕籠を彼の傍にすえさせた。(中略)藤兵衛が顔色を変えて飛び出そうとするのを、弥作は引き戻した。眼で、黙つて見ていると命じた。幸太を乗せた屋敷の駕籠は、武士を先にして、再び常盤橋門内に入った。(中略)藤兵衛としては、折角の重罪人を何ともしれぬ屋敷者に連れ去られたのが不安でならないのだ。幸太はどこへ入つたのか分らないという

謎が残されるわけである。一方、織部は、藤兵衛グループの二人、香月弥作と釣り場で会う。「いや、実は『若い男は健康そうな笑い方をして、『鯖江侯の藩邸がわたしの近所なんですよ』『ご近所？』香月弥作の頭には、常盤橋門内の大名屋敷の図が忽ち波紋のようにひろがった。これは幸太が門内に消えたときから調べていたことである。間部侯の屋敷は、その門を入つてすぐに左だった。その前が福井少将松平侯の屋敷間部侯の隣りが太田摂津守(略)』」清張は、先の「江戸切絵図」を使いながら屋敷の配置を書いている。この後、幸太らしい男が越前鯖江藩間部家の屋敷の中に監禁されていることが分る。それを、織部が釣り友だちの香月と、越前福井藩松平家の屋敷から一緒に見る。何となく『点と線』を連想させる設定である。その後、幸太はまた解放され、間部松平両家の二重スバイの喜十が追いかける。「日本橋の二十八間は長かった」こんどは⑪の辺り、日本橋からスタートする。「大久保伊勢の家の中の者がどこかで自分を見ている」。二重スバイなので、松平と間部の両方からいられる。その緊張感の中で喜十は尾行する。「喜十は幸太のうしろを一間のところに接近した。彼は鋭い眼を左右にそれとなく配つた」。敵味方入り乱れての難しい追跡劇である。やがて喜十が幸太を捕まえようとした瞬間、どこかの新造が出てきてこれを阻む。その女性と共に幸太は消えていく。絵図のE、Fの辺り、川つぎである。家の裏側にトイレがある。実はトイレから河岸にぬけて、船で川を下つて行く。最終的に⑮、⑯へと逃げられ、幸太は消え去ってしまう。

《考証》

スケールの大きい精緻巧妙な長編作品であるが、歴史学から考証すると問題はあある。例えば、「大奥は男子禁制だが、將軍だけは、夫人ま

たはお手つきの女中のごとくに休息に入った」とあるが、大奥が男子禁制で将軍しか入れないというのは誤り。老中が見廻り、雨漏りすれば大工の男性も入る。広敷(大奥の玄関口)辺りには男性の役人が多数勤務していた。

大きな問題は「江戸切絵図」である。切絵図は、前頁の絵図のように、江戸を三十分割くらいにしたエリア別の地図である。

本文にもたびたび出てくる。追跡する弥作の家で「女房お陸が夫のもとに旗本武鑑と木の箱とを持ってきた。武鑑には知行方、役職、官位、屋敷の所在地、家紋などがついている」。絵図は木の箱に納められ、「切絵図には江戸府内の地図が区分されて三十一枚入っている。弥作は、武鑑によって大久保家の屋敷町名を知り、切絵図の中から『四谷千駄ヶ谷内藤新宿辺絵図』を探して取り出した」。そして弥作は調べ始めるわけである。

しかし、『国史大辞典』中の「切絵図」(村井益男著)には、「江戸切絵図は、宝暦―安永期(田沼時代)にはじめてつくられた」とある。大岡越前守の享保期に、まだ切絵図はない。実は清張は幕末の切絵図を使って、享保期の小説を書いたのである。では、小説の設定の享保期における大名屋敷の配置はというと、越前福井藩は同じ場所である。しかし、向かいの屋敷は美濃岩村藩の松平能登守であり、間部ではない。要するに享保期の史実からすると、清張のトリックは成り立たないのである。

次は「辻番」である。「弥作は蔵前から近い浅草の三間(さんげん)町に行き、ひとまず辻番に駕籠を着けさせた」とある。しかし、町にある番所は「自身番」である。「辻番」は武士が詰める、武家屋敷の角にあった。これらは道が交差する所に多くあったので、近代に「交番」となる。清張自身、連載途中でこの誤りに気付いたらしい。後で、わざわざ「町家が大きな四つ角になると自身番があるが、そこも戸を閉めていた。武家屋敷になると辻番がある」と説明的な文章が出てくる。

《謎解き》

しかし、私が驚いたのは、物語の大きな骨格である。この話の背景に八代将軍吉宗の後継をめぐる長男家重派と二男宗武派の対立が描かれている。史実によれば家重は病弱で、精神的にも非常に不安定だった。比べて宗武は文武両道のクレバーな若者で、多くは「こちらを慕っている。そこで、家重ではなく宗武を将軍にした方がいい」という意見が幕閣、官僚の間に高まってくる。この宗武を応援するリーダーが老中の松平乗邑(のりさと)で、大変力のある佐倉藩主であった。この史実に清張はフィクションを加える。すなわち、佐倉藩の御用商人川勝屋長次郎には一人の子どもがいる。総領がやはり病で、どうも家重と同じく精神的な病気である。次男坊は「こちらがクレバーで、皆が期待する。さらに早く亡くなった長次郎の母親の素性がよく分らないが、どうも越前訛りがある。

一方、家重の母親はお末の方という。これは清張のトリックで、本当の名は、お須磨である。そして、お末は、越前細木村の出身とされる。以前御庭番が吉宗に指示されてこの細木村を調べに行き、殺されている。殺した側は家重を応援する老中たちである。老中の安藤対馬守と大久保伊勢守、二人とも実在する。

吉宗と川勝屋は同じ構造になっており、病気という大きな問題が存在する。さらにここに二つの藩が絡んでくる。鯖江藩間部家と、福井藩松平家である。双方とも相手に騒動があれば、自分の領地が拡大すると考えている。越前の二つの大名家と、将軍家の関係と川勝屋の関係、この三層構造の枠組みの中で、清張は事件を描いているのである。

《結論》主張

ラストシーンの弥作と藤兵衛の、役人同士の釣をしながらの会話は、この話のまとめでもある。「『じゃ、(秘密を知った人たちが殺されてい

く)今度の一件の回り灯籠の中心は何でございませうか?』『そうだな……この世を治めている政道だろ?』(中略)『この政道のために、ときどき真実が犠牲にされる。世の中は、そういう方法で秩序が保てるのだ』『お上が曲つたことをなさる。……つまり、大の虫を助けるために小の虫を殺してもいいというわけですね?』『政道の便利のためと云っておこう』

要するに、長男の家重を将軍にしないで、実力や能力のある人を将軍にすると、各藩でもそれを真似、必ずお家騒動になる。そのため、長子相続は守らねばならず、母親の出身地にかかわる家重の病気は表沙汰にできない。これが吉宗や安藤たちの主張で、最後は松平乗邑も失脚する。これが「政道」というわけである。大岡についても「名奉行だからこそ曲つたことをするのだ」「そんなもんですかね」藤兵衛はまだ分らない顔をしている「清張らしい言い回しである。

そして、本多織部と弥作の会話である。「『本多さん』弥作は織部に元談のように言った。『この一件でたしか人間が七人死んでいます』(中略)『わたしもそれにはおどろいています。まさかこれほどの影響があるうとは思わなかった。政道というものの怖ろしさが、今度くらい身にこたえたことはありません』」

叔父の山下幸内こと本多源二郎に続いて織部が退屈しにぎに、お末の方が病気の元である越前細木村の出身であると書いて、目安箱に入れたことから事件は始まった。そこに越前に領地を持つ二つの藩の対立が絡んで、次々と殺人事件が起きたのである。

『『そういうえば』と、織部はやり返した。『あなたの推察した福井藩の野望を砕いたのは大岡奉行ということになりました。むろん、わたしも大岡さん個人がそう計らったとは思いません。上からの命令を忠実に処理したのだと思います。だが、これで大岡さんはますます上のほうから……決して下からではありません。上のほうからです。上のほうから名奉行として称讃

されるでしょう』

政道を歪めてでも將軍家の安泰を守った。だから大岡忠相は名奉行だという皮肉です。民衆的な視点評価と権力内部からの視点評価の違い、その違いを清張は記しているのである。元々、清張は大岡の人気を民衆が作り上げた反権力のヒーローフィクションとして捉えている。しかし、このやりとりは、むしろ、権力者が作ったヒーローとして、大岡をとらえることの可能性も指摘しているといえる。

研究発表

『神々の乱心』と大連阿片事件

講師 平石 淑子

日本女子大学 教授



《要旨》

発表は、実際の大連阿片事件の概要を確認し、『神々の乱心』内の事件と比較しながら、松本清張が物語の重要な伏線としてなぜ阿片事件を選択したのか、その必然性を考究した。阿片事件のみを突出させたのは、阿片こそ関東軍を登場させる要素になるからであった。そして事件の起きた大正10年こそは、皇太子の摂政就任によって実質的に大正が終わった年であり、軍部が政治的権力を掌握する昭和の始動の年と清張は見たからであろう。清張の一番の興味は「昭和史」にあり、そこに向けての「大正史」に取り組んだのではなからうか。

特別企画展

セカイ

ブンガク

セイチョウ

ブンガク

世界文学と清張文学

Seicho Meets World Literature



**期間延長
のお知らせ**

開催期間：平成28年1月16日(土)～**8月31日(水)まで**

会場：記念館地階「企画展示室」

入場料：一般500円 中高生300円 小学生200円

※常設展示観覧料を含む。



■『世界文学全集』■

清張が足繁く通った小倉市記念図書館の蔵書印が捺された『世界文学全集』。少年時代の清張が、手に取った可能性は高い！

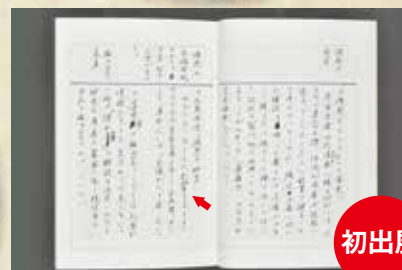


■海外で翻訳出版された清張作品■

清張作品は海外の様々な国で翻訳・出版されてきました。そのバラエティーの豊かさに、驚きと新鮮さを感じていただけるでしょう。



■清張自身によるイラスト■



初出展

■直筆資料(創作ノート『EQ』)■

サルトルがカミュに影響を与えたとする「不条理の文学」成立についての考察が見られます。

「トランク」



当館最大の展示物は、言うまでもなく再現家屋である。この清張資料の宝庫から、今回の展示品をご紹介します。

第二展示室の再現家屋を奥に廻りこむと、ガラス張りの書庫が見えてくる。二階から見上げた棚に、大きな暗緑色のトランクが置いてある。

旅を愛した作家のトランクだ、気になる人は多いだろう。いちばん気になるのが、中身である。結論から言うと——「謎」です、ごめんなさい。片方のリフトレバーがロックされたまま開かない。耳をすまして

微かに揺ると、空しい反応が返ってきた。おそらく、中身は空っぽなのだろう。持ち手の横に「STRAWAN」というメーカー名が入っている。リフトレバーに貼られたシールには、「HKG」(香港)の印字がある。1977、8年の香港取材旅行に使用したのだろうか。実は収蔵庫にも、もうひとつ周り大きなトランクがあ

る。これは「Wondrelie」というメーカー。やはり鍵が掛かって開かず、中は空のようだ。

海外取材に同行した藤井康栄館長(元文藝春秋編集者)によると、これらの頑丈なトランクは主に運搬用として使用し、本人は、大きな革の手提げ鞆を持ち歩いていたという(第二展示室のケース内に展示している)。「草の徑」取材でヨーロッパを廻った清張は、後々まで思いつく限り、「大木さん(藤井館長)が毎回トランクの上に乗って閉めてくれた」と言っていたという。

清張が描いたイラストにも、トランクが見える。随分活躍したことだろう。長年、旅の相伴をしたこのタフガイも、今では、記念館の中で静かに休んでいる。



北からスイスに入ると、ちよつと旅の半ばになる。そろそろ、残りの金が無くなって、風光明媚なレマン湖畔のホテルで持ち金の勘定をする。法定5000弗の所持金だから、代議士の豪奢に腹がたつ。右、「清張ヨーロッパを行く」(「文藝春秋漫画読本」一九六四年十月号)に掲載された清張によるイラストと文。

(専門学芸員 柳原 暁子)

点描 「夏島」——明治史余滴

夏島は、横須賀市北東端に位置した島。昭和初期に周囲が埋め立てられたために、かつて対岸であった追浜とは陸続きになっていた。現在では町名として用いられている。名称の由来には二説あり、一つは海からの風が強く冬季でもまったく雪が積もらないからとするもの(新編相模、いまひとつは全島鬱蒼とした樹木に覆われ、かつ潮流の関係で四季を通じて温暖であるから(田浦町誌)とするものである(※1)。

伊藤博文は神奈川県金沢八景周辺に二つの別荘を建てている。一つは明治九年に夏島に建てたものであるが、二年に「砲台築造が始まったので、同年夏、小田原緑町に夏島別荘の移築を始め、〇月に完成させた(※2)ため、現存しない。もうひとつは明治三年に野島に建てたもので、現在は「旧伊藤博文金沢別邸」(横浜市指定有形文化財)として公開されている。公式ホームページによると、大正天皇や韓国皇太子なども訪れたという。

夏島別荘の跡には「明治憲法起草遺跡記念碑」(大正五年、伊東巳代治撰文。前号に写真掲載)がさらに二キロメートルほど離れた場所には、夏島別荘に移る前に草案を練った料亭「東屋」跡を記す碑「憲法草創之處」(昭和〇年、金子堅太郎書)がある。



旧伊藤博文金沢別邸(横浜市金沢区野島町)

もし、この臆測があたっているとすれば、〇〇(※3)と星亨との共謀は成功したのである。この推理は、もつと材料を得るならば、明治史のページを書きかえることになるかもしれない。

② 夏島現景

わたしが野島公園を出る時分、なんだか頭のまわりが不快な暑さを感じられてきた。(文藝春秋「松本清張全集66」『夏島』より)

(この臆測)については前号で書いた。「夏島」は短篇ながら、登場人物は伊藤博文ほか、共に草案を作成し真相を知ると疑われる伊東巳代治、政治講談で知られた講師の伊藤痴遊、痴遊が自著「政界回顧録」で星へ草稿を渡した人物とする後藤象二郎など、明治の政治家や文化人が数多く登場、複雑に絡まりながら展開する。

作者の史料の博搜ぶりが窺えるのも、注目すべきポイントだろう。「帝国憲法と金子伯」「伊藤博文伝」「伯爵伊東巳代治」「西哲夢物語」「明治文化全集」「政界回顧録」忘れられた明治史I……この短い作品を書くために、これだけの手間がかけられているのか!

(双葉文庫「松本清張初文庫化作品集③ 途上」「解説」細谷正充著より)

(わたし)が帰りに感じた(不快な暑さ)とは、憲法の(軟着陸)をみるまでの複雑怪奇な営みが放つ、隠微な熱によるものか。

いま夏島の碑が残る場所からは、近くに日産自動車の工場が見える。そのルーツを辿るとき、浮上する戸畑鋳物株式会社は、明治四三年、福岡県戸畑町(現北九州市戸畑区)が創業の地。不思議な縁を感じつつ、夏島を後にした。次号へつづく。

(※1)『角川日本地名大辞典 一四 神奈川県』昭和五九年、角川書店(清張蔵書)

(※2)『伊藤博文 近代日本を創った男』伊藤之雄著、二〇〇九年、講談社

(※3)作品には清張が推理した主謀者の名前が書かれているが、未読の方のため、ここでは敢えて伏字とした。

(加地 尚子)

研究誌『松本清張研究』第十七号発刊

特集 清張と戦争

特別対談 朝鮮の風景・衛生兵の日常

——清張の軍隊生活

半藤一利 小森陽一

論文 ハンドウを回された男

——『真空地帯』への『遠い接近』——

山田有策

『黒地の絵』論 —— 戦争のもう一つの悲劇に迫る虚構

綾目広治

戦争の遍在／戦場の不在

——『絢爛たる流離』のリダンダンシー

紅野謙介

引揚げの記憶を表象／隠蔽すること

——松本清張「赤いくし」論——

久保田裕子

固有名と無名 —— 『象徴の設計』の視界 ——

高田知波

松本清張が書いた戦争 —— 火野葦平などと比較しながら

小林慎也

折れた剣 —— 弥生社会から見える古代国家

高島忠平

エッセイ 『厭戦』にみえる針尾佐平の死について

直木孝次郎

権威でありたい

田中慎弥

再録 「任務」

松本清張

国際共同研究の成果から

松本清張文学の葉脈

——ル・ボン、魯迅、李光洙、本間久雄、木村毅、バーナード・ショーなど——

南富鎮

記念館研究ノート

「黒地の絵」論 —— 松本清張が北九州から見つめた世界

柳原暁子

記念館だより 編集後記

友の会 活動報告

● 清張サロン

清張サロンは毎回、清張作品や清張に関する話題をテーマに、講師を招いてのお話や参加者との意見交換・交流を目的に年8回程度開催しています。昨年11月と2月に、下記のとおり2回開催しました。第3回清張サロンは、戦後70年にちなんだテーマでお話していただきました。いずれも参加者の皆様により深く清張作品に触れて楽しんでいただくことができ、充実したサロンとなりました。

- 第3回 11月27日(金) 14:00~16:00 参加者16名
 ●会場 記念館 会議室
 ●テーマ 松本清張の戦中・戦後 —「半生の記」から「黒地の絵」まで
 ●講師 小林慎也氏(元梅光学院大学教授・友の会会長)
- 第4回 2月 4日(木) 14:00~16:00 参加者25名
 ●会場 記念館 会議室
 ●テーマ 特別企画展「世界文学と清張文学」
 ●講師 柳原暁子氏(記念館・専門学芸員)

●友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集●

松本清張記念館友の会は8月1日～翌年7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、「友の会だより」の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。友の会入会のお申し込みは、松本清張記念館友の会事務局まで

TEL. 093-582-2761

● 生誕祭

12月11日(金) 参加者 45名
 記念館 企画展示室

松本清張さんの106回目の誕生日を友の会会員でお祝いする「生誕祭」を開催しました。最初にケーキへのローソク点灯などがあり、誕生会らしい和やかな雰囲気の中で始まりました。

今年は、友の会の小林慎也会長に、新聞記者として清張さんを取材した時の思い出を語っていただきました。また、当館オリジナル映像「点と線」(動画)を鑑賞し、クイズなどで楽しみました。



各テーブルに配られたケーキとコーヒーをいただきながら、会員同士の交流も深まる生誕祭でした。



平成27年度・ドラマ化された清張作品



時代小説全12話(☆)が「松本清張ミステリー時代劇」として放映されました。28年度も、新聞テレビ欄等のチェックをお忘れなく。

<放送日>	<原作名>	<主な出演者>	<制作局>
H27.4.7(火)	「流人騒ぎ」☆	武田真治、福田沙紀	BSジャパン
H27.4.14(火)	「七種粥」☆	星野真里、田中幸太郎	BSジャパン
H27.5.5(火)	「役者絵」☆	雛形あきこ、松田悟志	BSジャパン
H27.5.12(火)	「左の腕」☆	升毅、宮武美桜	BSジャパン
H27.6.2(火)	「大黒屋」☆	塩谷瞬、せんだみつお	BSジャパン
H27.6.9(火)	「山椒魚」☆	ラサール石井、宮地真緒	BSジャパン
H27.7.6(月)	「影の地帯」	谷原章介、上川隆也	TBSテレビ
H27.7.7(火)	「逃亡」☆	阿部力、モト冬樹	BSジャパン
H27.7.14(火)	「大山詣で」☆	袴田吉彦、寺島咲	BSジャパン
H27.8.4(火)	「虎」☆	内田朝陽、山口あゆみ	BSジャパン
H27.8.11(火)	「雨と川の音」☆	鳥羽潤、松村雄基	BSジャパン
H27.9.8(火)	「赤猫」☆	金子昇、ダンカン	BSジャパン
H27.9.15(火)	「町の島帰り」☆	国広富之、野村佑香	BSジャパン
H27.9.30(水)	「共犯者」	観月ありさ、仲里依紗	テレビ東京
H28.3.12(土)	「地方紙を買う女」	田村正和、広末涼子	テレビ朝日
H28.3.13(土)	「黒い樹海」	北川景子、向井理	テレビ朝日
H28.3.30(水)	「喪失の儀礼」	村上弘明、剛力彩芽	テレビ東京

出前講演に行ってきました!

講演日：1月22日(金)、2月19日(金)

会場：市立年長者研修学校「穴生学舎」

演題：「松本清張と筑豊」

受講生：約40名

講師：当館学芸担当 中川里志 主査

郷土の近代化の歩みと地域のなりたちを学ぶコースのなかで、ゆかりの文学者として清張を紹介。



編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813

北九州市小倉北区内2番3号

TEL093-582-2761

FAX093-562-2303

http://www.kid.ne.jp/seicho



イラスト・山藤章二

開館時間：午前9時30分～午後6時(入館は午後5時30分まで)

観覧料：一般500円(400円)・中高生300円(240円)・

小学生200円(160円)()内は30名以上の団体料金

○JR小倉駅より徒歩15分・西小倉駅より徒歩5分

○バスは《小倉城・松本清張記念館前》下車

○車は北九州市高速、大手町ランプより5分

平成28年度

中学生・高校生

読書感想文
コンクール

■応募対象 全国の中学生・高校生

■課題作品 中学生・高校生ともに下記から一作品

募集

「**或る「小倉日記」伝**」(「或る「小倉日記」伝」角川文庫、新潮文庫、
『宮部みゆき責任編集 松本清張傑作短篇コレクション』上 文春文庫)

「**高校殺人事件**」(「高校殺人事件」光文社文庫)

「**点と線**」(「点と線」新潮文庫、『長篇ミステリー傑作選 点と線』文春文庫)

■応募方法

○中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。

○手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし、全体の字数が分かるように応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。

○原稿は自作で未発表のものに限ります。なお、応募原稿はお返しいたしませんので、必要場合はコピーをおとりください。

■応募締切 平成28年10月31日(月)※当日消印有効

■応募先 松本清張記念館 感想文コンクール係
※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

■選考 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■発表 最優秀賞、優秀賞の受賞者には、12月下旬頃、本人と学校に通知し表彰式を行います。なお、入選の結果は、当館発行の「館報」で発表します。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■賞品 (受賞人数等、変更の場合もあります。)

○最優秀賞(1名)

《モンブラン》万年筆「マイスターシュテックNo.149」

○優秀賞(中学の部…1名)(高校の部…1名)文具など(未定)

○佳作(中学の部…3名)(高校の部…3名)図書カード 他

※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各一回ずつの受賞とらせていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。過去の受賞者からの応募作品が賞に該当する場合は<特別賞>として「館報」掲載を予定しています。

●協力 モンブランジャパン

●編集後記●

歲月人を待たず。開館20周年を2年後に控え、さらに飛躍の時を迎えています。

清張が残した膨大な仕事に突き動かされるのごとく、館内のマグマは絶えず蠢き、留まるところを知らません。「来館者に勇気をつか続ける施設でありたい」——設立当初からの思いを一人でも多くの方に受け取っていただけるよう、これからも新たな取り組みに挑戦していきます。ご来館を心よりお待ちしております。(N. K)

